

【事例紹介】

日韓学生の協働による グローバル人材育成

Global Human Resources Development through Collaboration
between Japanese and Korean Students

米子工業高等専門学校国際交流支援室長 浅倉 邦彦

ASAKURA Kunihiro

(Dean of International Exchange Division,

National Institute of Technology (KOSEN), Yonago College)

キーワード：日韓学生協働、グローバル人材育成

1. はじめに

米子工業高等専門学校（以下、米子高専と記載）が位置する鳥取県米子市周辺では、鳥取県は韓国の江原道と友好提携を、米子市は江原道の束草市と姉妹都市提携を結び、航空便や定期貨客船などの交通アクセスも整備され、双方地域の活性化に繋がる幅広い分野での交流が継続的に行われている。また、北東アジア地域国際交流・協力地方政府サミットでは、各地域政府間の相互協力及び友好関係を、今後いっそう積極的に推進・発展していくことで一致している。

このような状況を踏まえ、地の利も活用し、米子高専では韓国の協定校である南ソウル大学及び群山大学と連携し、日韓学生の協働によるキャリア研修、語学研修、科学技術研修、リベラルアーツ研修等を通じた次代を担うグローバル人材育成事業を実施している。本稿では、受入プログラムである「地域と共に考える環日本海海洋環境問題」及び「科学技術インターンシップ」、派遣プログラムである「韓国文化理解研修」の各事例を紹介する。

2. 受入プログラム：地域と共に考える環日本海海洋環境問題 —海は人をつなぐ研修—

日本海沿岸には、対馬海流が運ぶ日本国内からの海洋漂着ゴミに混じって環日本海諸国からのゴミも散見される。鳥取大学と共催する本プログラムは、こういった海洋漂着ゴミを地域の協力の下、留

学生を含む本校学生と韓国からの短期留学生が協働して回収し、海洋環境問題を共に考えることで、地球の一員としての倫理力を備えたグローバル人材を育成することを目的としている。また、日韓両国の心温まる交流の歴史をたどり、海を介した人のつながりを体感すること、様々な文化交流を通して相互に異文化を理解することも大きな目的である。実施期間は、韓国の大学の夏季休暇が始まる6月下旬から7月上旬にかけての約10日間である。活動地域は、鳥取県、兵庫県北部、京都府北部、福井県西部と広域にわたるが、そのうち鳥取県西部(米子・境港・大山プログラム)、福井県西部(若狭湾プログラム)を本校が担当している。今年度は、南ソウル大学から8名と群山大学から6名の学生を受け入れ、本校からは、日本人学生23名と留学生5名が参加した。なお本プログラムは、2015年度から独立行政法人日本学生支援機構の留学生地域交流事業として公益財団法人中島記念国際交流財団の助成を受けて実施している。

(1) 米子・境港・大山プログラム

米子高専が所在する鳥取県西部の弓ヶ浜半島は北西に向かって細長く伸びた砂州で、その日本海側には「日本の白砂青松100選」に選定される美しい松原をともなった砂浜が広がる。この砂浜にも海洋漂着ゴミが点在するため、日韓学生が協働で回収し、ゴミの量、種類、由来等の調査を行う。大半の漂着ゴミは日本由来のものであるが、韓国、中国などの環日本海諸国からのゴミも混じっている。



薬品ボトルなどの危険物が見つかることもあり、驚かされる。今年度は受入初日に海洋漂着ゴミ回収を実施し、本校からは今年9月の韓国文化理解研修に派遣予定の学生22名が参加して、韓国学生と共に環境問題について検討した。上の写真は海洋漂着ゴミ回収後の検討会の様子である。猛暑の中、日韓学生が共に汗を流しながらゴミを拾い、そこで交わされる会話をきっかけに心が打ち解け合っていく様子に、明るい未来を感じさせられた。海洋漂着ゴミ回収の他に、本プログラムでは本校茶華道部による茶道体験、大山青年の家でのうどん作り体験などの日本文化体験を通じた異文化交流も実施した。特にうどん作り体験は、日韓学生の混成グループによる協働作業の中で自然とコミュニケーションを取ることができ、お互いの仲を深めることができる非常に有意義な交流の場となっている。

鳥取大学プログラム、若狭湾プログラム(後述)を経て、帰国前に再び鳥取県西部で交流活動を実施した。帰国の前夜は、日韓学生+本校留学生(イ



インドネシア、マレーシア、モンゴル、ラオス)の混成グループごとに、約10日間のプログラム全体の振り返りを行い、最後にまとめたポスターを使った報告会を行った。プログラムを通して親交を深め合った仲間との振り返りは非常に盛り上がり、プログラムのまとめに相応しい活気のあるイベントとなった。写真は発表後の集合写真である。参加者全員の笑顔が印象的な一枚である。

(2) 若狭湾プログラム

若狭湾は日本海側では珍しい大規模なリアス式海岸が特徴で、その風光明媚な地形は国定公園に指定されている。この若狭湾には、特徴的な海岸がゆえに多くの海洋ゴミが漂着する。本プログラムでは、若狭湾青少年自然の家を拠点とし、海洋漂着ゴミ回収に加え、スノーケリングによる海中ゴミ調査、ボート、カッターによる海上からの漂着ゴミ調査を実施する。併せて、小浜市にある韓国船遭難救護の碑を訪れ、約120年前に遭難した韓国船の救護にまつわる心温まるエピソード¹を救護者の子孫・大森和良氏から拝聴し、海を介した人のつながりを体感する。

今年度の若狭湾プログラムには、本校留学生5名、日本人学生1名が参加して韓国学生14名と共に海洋環境問題を考えた。陸からは見えない所にも多くの漂着ゴミがあることを知り、環境問題を広い視野で多角的に考える契機となっただけでなく、これまで意識せずに行っていた環境への配慮を欠く行動を見直す良い機会となったようである。また、よさ



こい祭り体験や保育園訪問を行い、日本の文化や幼児教育を肌で感じる経験をした。よさこいを披露する際の真剣なまなざし、園児たちの無邪気な笑顔、地域の方々のおもてなしの心に一同感銘を受けた。参加者からは、「この研修での異文化交流を通して、言葉の壁を乗り越えてお互いを理解し合えるようになった。」、「たくさんのことを学ぶことができ今後の人生に生きるいい経験ができた。」との声があった。写真は韓国船遭難救護の碑での集合写真である。写真の一番右が大森氏である。

(3) よなご国際交流フェスティバル

¹ 明治33(1900)年1月12日、15日間漂流し漂っているところを漁村・泊村(現小浜市泊地区)の村民に救出され、93人の乗員は全員無事に帰国できた。言葉も通じない中で、なんとかお互いの習慣の違いを理解し、乗員たちは「このもてなしの心を忘れません」と言葉を残し、帰国の途についた。

毎年9月に開催される標記イベントにおいて、本校留学生を中心としたメンバーで環日本海海洋環境問題に関するポスター展示、海洋漂着ゴミのサンプル展示を行い、来場する地域住民と共に考えることで、地球社会に貢献できるグローバル人材育成を推進している。参加した留学生からは、「留学先の地域の問題を地域の人たちと共有できて良かった。」、地域住民からは、「弓ヶ浜に外国からのゴミが漂着してきているなんて知らなかった。」といった声があった。写真は展示ブースの様子である。



3. 受入プログラム：科学技術インターンシップ

2016年度から実施する本プログラムは、韓国の交流協定校から学生を約半年間本校に受け入れて、科学技術研修、就業体験、専門科目・日本語講義の聴講に加え、韓国語講義のティーチングアシスタント、地域交流、日本文化体験等も実施する科学技術インターンシップである。本プログラム全体を通して本校学生と協働する場面が多くあり、本校学生にとっても異文化理解、グローバルマインド育成の機会となっている。

現在、韓国は未曾有の就職難にあり、日本での就業を希望する学生が多い。一方、日本国内、特に地方における人材不足は深刻な状況にあり、海外からの人材受け入れを促進していく必要がある。こういった状況下で、将来的に日本での就職を視野に入れている韓国の学生に実践的な工業系知識と日本国内で生活体験を提供し、県内企業にはインターンシップとして一時的な受入を通して実際の雇用に備える機会を提供することで、双方の問題解決の一助とすることも本プログラムの狙いの一つである。さらに、鳥取県が推進している企業と高度外国人材とのマッチング機会の提供等、様々な支援について企業へ橋渡しする役割を担い、地域貢献も果たしている。

昨年度は、9月下旬から2月下旬の5ヵ月間、群山大学産業融合工学部ソフトウェア融合工学科2年生の学生1名を受け入れた。科学技術研修では、ソフトウェア工学が専門の指導教員の下で、まずプログラミング言語の一つであるC#(シーシャープ)言語の演習を行い、プログラミング技術の向上を確認した後、「ブロックス(Blokus)」とよばれるチェスに似た頭脳を使うボードゲームのソフト開発を行った。受入学生は、群山大学ではチームプロジェクトの分担作業しか経験していなかったが、本校での研修で初



めて全て一人で開発したため、プログラミング技術の向上を実感する有意義な体験となったようである。

また、鳥取県と連携して企業マッチングを行い、地域の情報系企業での5日間の就業体験の機会を得た。派遣先企業では、Visual Basicを用いた機械制御プログラムとそのインターフェース作成、データベース構築の実習を行い、日本企業の就業環境を知る貴重な体験となった。写真は就業体験の様子である。

昨年度の受入学生は、ソフトウェア工学やマイコン制御、計算機工学などの専門科目、日本事情などの留学生向け一般科目を聴講し、専門知識の習得と日本語能力の開発を行った。本校5年生向けに開講する韓国語講義では、ティーチングアシスタントとして韓国語の音読、発音練習の支援、韓国の文化や流行などの紹介を行った。なお、聴講した科目については本校より聴講証明書を発行し、それに基づき群山大学において単位認定がなされている。



このような長期間の受入の場合、受入学生のメンタルサポートが非常に重要である。本プログラムの担当者は、週1回90分間の面談時間を設けて研修の様子、生活の状況を常に把握するよう努め、必要なアドバイスを適宜与えた。また、地域交流や日本文化体験等をバランスよく実施し、リフレッシュする機会も提供した。地域交流としては、本校に隣接する米子市立彦名小学校への出前講座を実施し、韓国の遊びを教えて一緒に体験したり、鳥取県に関するクイズを解答したり、お互いに笑顔になる体験をした。日本文化体験としては、松江城、出雲大社等の日本文化を体験できる史跡の見学や温泉の体験をした。写真は松江城での記念撮影で、写真中央の受入学生も本校スタッフ、学生と一緒に楽しんでいる様子がうかがえる。

4. 派遣プログラム：韓国文化理解研修

本プログラムは、韓国協定校の学生との交流を通して韓国文化を理解すること、異文化異言語世界で直面する困難を乗り越える能力を育むことを目的とし、2013年度より毎年実施としている。主な研修内容は、韓国企業見学や大学工学部体験を通じた科学技術研修、フィールドワークを通じた異文化交流研修、歴史的史跡や施設見学を通じた歴史研修で、「海は人をつなぐ研修」で受け入れた韓国学生を中心とする学生カウンターパートとの協働により実施する。実施時期は本校夏季休業中の9月上旬から中旬の8日間(昨年度まで4,5日間の短期プログラムと並行実施)である。活動場所は、韓国の中心ソウルと、本校協定校が所在する天安、群山とその周辺地域である。今年度は本校学生21名を派遣

して実施予定である²。

昨年度は、低学年の学生を中心とした「韓国研修旅行」を9月7日(金)～11日(火)に、国際交流事業への参加経験のある学生を中心とした「韓国ステージアップ研修」を9月7日(金)～14日(金)に実施した。同一行程となる前半の5日間では、研修旅行8名・ステージアップ研修6名、計14名の参加学生が、サムスン・イノベーション・ミュージアム(SIM)やセマングム防潮堤の見学といった海外技術



研修、南ソウル大学と群山大学の学生とのフィールドワークや交流授業などの異文化交流研修、ソウルの故宮博物館や百濟最後の都・扶余の扶蘇山城他での歴史研修を実施した。初めての海外体験だった学生も多く、はじめは緊張した様子だったが、帰るころには笑顔が溢れ、「帰りたくない。また来年も参加したい。」「もっといろいろな国に行ってみたい。」などの声が多々あった。写真は左から、扶蘇山城での集合写真、交流授業の様子である。

9月11日(火)より研修旅行と別行程となったステージアップ研修参加の6名は、群山大学工学部の授業参加や研究室訪問、人文学部での日本語授業支援などの大学体験、ヒュンダイ自動車の工場見学、ホームステイ体験など、少人数研修ならではの濃密な研修を体験することができた。参加学生からは、「外国から日本を眺めることで、日本のことをより知ることができた。」「今後の人生における自信に繋がった。」といった声があった。写真は群山大学工学部での研修室訪問の様子である。



5. おわりに

このように米子高専では、日韓双方向育成事業を通じ、心の通った様々な交流活動によって異文化理解を促進すると共に、異文化異言語世界で直面する困難を乗り越える能力を育み、地球の一員とし

² 本稿執筆時点では実施前

での倫理力を備えたグローバル人材の育成を推進している。

今年7月にモンゴルで開催された第24回北東アジア地域国際交流・協力地方政府サミットにおいて、韓国江原道代表者³は昨今の日韓関係の悪化について憂慮の意を表し、日韓交流のモデルと評される両地域の交流が途切れることなく続いていくことを要望している。米子高専においても、実り多い本交流プログラムを今後も継続し、日韓両国のグローバル人材育成を引き続き推進していく考えである。

³ 鄭萬昊(チョン・マノ)氏、現韓国江原道経済副知事